
私の胸はP A Dじゃない！

ソースケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の胸はPADじゃない！

【Nコード】

N4595F

【作者名】

ソースケ

【あらすじ】

ある朝紅魔館に務めるメイド・十六夜咲夜がいつものように朝食の準備をしていると、紅魔館の主・レミリアスカーレットが新聞を読んでいる大きな笑い声を上げた。何事か、と怪訝に思う咲夜。そこには咲夜の胸について、黒い疑惑の記事が掲載されていたのだ。た・・・。

私の胸はPADじゃない！第一話（前書き）

えと、タイトルで分かるとおり、これは私の咲夜さんへの愛が暴走した、かなり痛いSSです。

咲夜さんファン以外は、読まないほうがよろしいかと思います（ファンでも冗談の分からない方は読まないほうがよろしいかと・・・）。

小説についての批評は承りますが、私のキャラ観についての誹謗中傷は受け付けておりません。

納得なされた方だけ、先にお進みください。

私の胸はPADじゃない！第一話

「お嬢様、ベーコンエッグが焼きあがりました」

紅魔館に勤める瀟洒なメイド、十六夜咲夜はいつものように、朝食のベーコンエッグを紅魔館の主、レミリア・スカーレットの前に差し出した。

「うん」

レミリアは昭和時代のお父さんのように新聞を読みながら生返事をする。

読んでいる新聞は『文々。新聞』だ。

文々。新聞とは射命丸文という天狗が発行している新聞で、眉唾な記事も多いが、書いてあること自体は面白いらしく、ネタ的な人気のある不定期発行新聞である。

「・・・ん？あつはつはっ！」

新聞に目を通していたレミリアが、いきなり大きな声を上げて笑い出した。

突然笑いだしたレミリアに、咲夜は怪訝な視線を送る。

「・・・お嬢様。いかがなさいました？」

「みてよ、これ」

あるページを見開きにして、レミリアは咲夜に新聞を手渡す。そのページには・・・。

『紅魔館の瀟洒なメイドと名高いS・I、胸PAD疑惑！？』

とセンサーシヨナルに書き立てられている。

「・・・なんですか、これは」

いちおーイニシャルにしてあるものの、紅魔館で働いているメイド、と書いてある時点で幻想郷に住んでいる人間にはバレバレである。

そもそも、このせまい幻想郷でイニシャルで表記することに何の意味があるか分からなかった。

で、写真も載っている。

いつ撮られたのか、黒い目線の入った、メイド服の自分の写真。しかもご丁寧に、胸元にわざわざ丸で印をつけてある。この黒い目線も、ほとんど意味がないような気がした。

「まあまあ、記事を読んで御覧なさい」

面白そうに言うレミリア。

あまりにもバカバカしい記事だったので読む気にもなれなかった咲夜だったが、レミリアに言われたのでは仕方ない。

咲夜は続きに目を通す。

『紅魔館で働くメイドさんS・Iさんは、普段紅魔館で働いているときや弾幕を張っているときなどは、いたっておしとやかな目立たない胸をしているにもかかわらず、以前行われた格闘大会においては、なぜか非常に目立つ胸をしていたことから・・・』

なんだ、この三文記事は。

で、さらに目撃者の証言とやらの記事も載っている。

『あゝ・・・確かに、大きさは変化していたような気がするな。女は胸じゃない、女は火力だZ E！（普通の魔法使いM・Kさん）』

『うんまあ、彼女も悩み多き年頃、ってことじゃないかしら。一度うちにおまいりに来たほうがいいかもしれないわね。あ、お賽銭を忘れずに。（博麗神社の巫女R・Hさん）』

これもイニシャルの意味がまるでないような気がする。

あ・・・あの二人・・・。

読んでいるうちに、なぜか腹が立ってきた。

今度あいつらと一戦交えることがあったのなら、ヤツらを叩き落しても、手持ちのナイフを投げ尽くすまで、自分は戦いを止めないか

もしれない。

もうひとつ、目撃情報。

『咲夜さんファンの里の男たちの間じゃ、親しみを込めて『PAD長』なんて呼んでるやつもいるよ。まあ、オトコってヤツはいくつになっても、好きな子に意地悪いいたいものなのかねえ。いやまあ、そういう俺も咲夜さんファンなんだけどね（咲夜さんファンクラブNO・89・匿名の男性）』

なんだ、そのPAD長ってのは。
全然親しみを感じないあだ名である。

・・・何も知らない素人どもめ。

紅魔館で着ているメイド服は来客やお嬢様たちのことを考えて、しっかりと身を固めたかつちりタイプのメイド服を着ているから、プロポーションが目立たないのだ。

あの格闘大会のときは動きやすさを考えて、薄手のメイド服で大会に臨んだ。

その分、プロポーションがはつきりする。

それで、このようなうわさが広まったのだろう。

記事は『彼女ほどの美貌の持ち主なら、胸の大きさなど関係なく殿方にもてるだろうから、堂々としておいてほしいものだ』と意味不明な結論で締められている。

ほめているのか、貶してるのか。

いや、これはどう考えても私をバカにしている。

この記事は謝罪と賠償を要求し、同じ歴史の悲劇を繰り返さないように訴えてもいいレベルのような気がしてきた。

だが、コトを騒ぎ立てて、『ならあの胸が自前だという証拠を見せ
てみる』と迫られるのも、ぞつとしない。

しかしこのまま『咲夜はPAD長!』と思われているのも、はだは
だ面白くない。

人のうわさなど頼着しない彼女のはずだったが・・・なぜか、それ
は非常に面白くないような気がしていた。

「あら。珍しくご立腹のようね、完璧で瀟洒な従者さん?」

さも面白そうに、わずかな皮肉を込めて、レミリアがいった。

「いえ、別に。こんなヒマ人のたわごと、付き合っていられませ
んよ」

そういつつ、朝食の準備を進める咲夜の動作は、明らかにいらだ
っているように見えた。

「ふむ・・・」

そんな咲夜を見てレミリアはわざとらしく腕組みをし、わざとらし
く考え事があるようなそぶりを見せ、わざとらしく手をポン、と叩
き、大仰な動作で椅子から降りると、古新聞を置いているラックか
ら一枚のチラシを取り出し、何事かこちらを見ていた咲夜にそれ
を手渡した。

「私もまるで興味なかったし、あなたもきつと関心を示さないだろ
うと思っていたから放っておいたんだけど」

咲夜は首をかしげながらそれを受け取る。

そのチラシには

『第2回幻想郷ミスコンテストのお知らせ』

と書かれてある。

確かに、普段の咲夜なら気にも留めない内容のチラシだった。

「・・・これがどうかしましたか?」

「審査内容を見てみなさい」

咲夜は言われるまま、チラシに目を通す。

まず予選があり、人気投票で選ばれた女の子上位数名が本戦に出場
する。

前回は咲夜は上位でエントリーされていたようだが、きっと咲夜の性格を鑑みて、主催者が本戦にエントリーさせるのをあきらめたのだろう。

本戦ではまず、普段着と笑顔で得点を競う。

そこでまた投票を行い、上位2名の決勝戦。

決勝での決闘は二種類。

まず、自分の好きな服装で観衆にパフォーマンスをアピールする。

そして最後に水着によるウォーキングを行い、観衆による決選投票でミス幻想郷を決定するらしい。

ちなみに半年ほど前に行われた第1回幻想郷ミスコンテスト優勝者は、永遠亭に住んでいる八意 永琳だったようだ。

咲夜はまるで知らなかったが。

「まあ、美しくあれ、というのもメイドのたしなみよ。参加してみたらどう？」

レミリアはそうだったが、明らかに興味は別のところにあるようだ。

ミスコンテスト。

咲夜は正直、つまらないイベントだと思った。

でも、お嬢様もあいつてくれてるし、それに……。

やっぱり『PAD長』と思われているのは、面白くない。

なぜ面白くないのか、理由を説明するのは非常に難しかったが、どうしても面白くない。

「そうですね。出ます。ミスコンテストとやらに」

咲夜は優雅なしぐさでチラシをレミリアに返すと、表面上はいつもと同じように、紅魔館のメイドの仕事へと戻っていったのだった。

私の胸はPADじゃない！第一話（後書き）

はい、痛かったですね。

まあ、私の二次創作なんてこんなものです（言い切った！）。

本当は二次創作で、この手のものは書かないほうが無難なんです。皆さんの中に、ミス幻想郷がいることでしょうか。

それでもまあ、作者の妄想に最後まで付き合ってやるか、という奇特な方がいらっしゃいましたら、ぜひ応援お願いします。

感想批評、お待ちしております。

（前書きにも書きましたが、私のキャラ観への誹謗中傷はご遠慮願います）

私の胸はPADじゃない！第二話（前書き）

本作品には相当なキャラ崩壊要素が含まれています。

ご自身がお持ちのキャラ観を大切にしたい人はお読みにならないほうがよろしいかと思えます。

あと、小説の内容についての批評は承っておりますが、私のキャラ観についての誹謗中傷はご遠慮くださいますようお願いします。

私の胸はPADじゃない！第二話

「これは十六夜さま。いらつしやいませ」

女性店員が恭しく頭を下げて、咲夜を出迎えた。

ここは幻想郷でも一番大きいテラーショップである。

テラーショップといえはなんだが大仰だが、要するにオーダーメイドの服も取り扱っている服屋さんのことだ。

紅魔館に棲んでいるレミリアやフランドール、それにパチュリーの服はすべて、この店に注文しているオーダーメイドである。

レミリアたちの服は、すべて最高級の素材を使い、一流のデザイナーにデザインさせていた。

当然、それらの服はとてつもなく高価になる。

その紅魔館のお嬢様たちのお使いでやってくるメイドの咲夜は、この店にとって上客だった。

「え・・・と。服を注文したいんだけど」

咲夜がおおずと切り出す。

「いつもありがとうございます。今回はレミリア様の分でございますか？」

「いや・・・」

咲夜は左右に首を振る。

「ではフランドール様のご着衣でございますか？」

「妹様の分でも・・・」

やはり、否定のしぐさ。

「パチュリー様のご着衣は先日御作りしたばかりのように思いますか・・・」

「いや・・・ね？えーつと・・・」

咲夜は視線を空中で泳がせてから、意を決したように言った。

「こ、今度のミスコンにでるから、そのときの舞台衣装を、と思つて・・・」

咲夜と店員の間に流れる、一瞬の沈黙。

「は、はあ。それはそれは。で、どなたがご出場なさるのですか？」
店員も近々ミスコンが行われることは知っていたが、紅魔館の面子とミスコンが、どうしても頭の中でつながらないようだった。

「・・・私」

「・・・えっ？」

大きく見開かれる店員の瞳。

「私よ！悪いの！？」

なぜか切れる咲夜。

「あつ！いえいえそんな・・・。ご無礼をお許してください。その・・・
なんといいですか、キャラにあわないことを、と思いまして！」

店員はよっぽど混乱しているのだろう、その言い訳では無礼に無礼を重ねていることに気づいていないようだ。

「・・・」

キャラにあわないのは、咲夜も百も千も承知である。

「・・・とりあえず舞台に出て恥ずかしいくない衣装を見繕ってもらえるかしら。私、衣服のことに関しては明るくないから」

「は、はい。ではコーディネーターを呼んでまいります・・・」

店員は何かに耐えるように肩を震わせ、店の奥へと消えたのだった。

「うーん・・・」

とうなっているのは、コーディネーターとして店の奥から現れた若い女性だった。

咲夜は大きな鏡の前に立たされて、いろんな衣装をあてがわれている。

「十六夜さんは肌が白いから、黒が際立つと思うんだけど・・・」
ぶちぶち言いながら、今度は真っ赤なドレスを陳列棚から持ってきて、咲夜にあてがう。

「情熱的な赤も捨て難いわね・・・。でもプラチナブロンドの綺麗な髪に、エメラルドグリーンのドレスも合いそうだし・・・」

コーディネーターの女性は赤いドレスにもインスピレーションを感じられなかったようで、今度は目の覚めるようなエメラルドグリーンのドレスを手にとって咲夜にあわせてみる。

「悪くない、とは思っただけだね……。素材がいいから、下手なドレスだと衣装が負けちゃうのよね……」

と、褒められている咲夜だったが。

（……退屈だなあ……）

選んでもらっている側の咲夜は、あくびをかみ殺すのに一苦労しながらはなかった。

どうも自分は、何かを人にしてもらうのが苦手な性格らしい。

しかし、こうやって服を買いに来るのなんて、いつ以来だろう？

小さいときは、両親があてがってくれた服を着ていた。

ハンター時代は目立たない迷彩服のようなものを着ていた。

レミリアに負けて、紅魔館のメイドとして働き始めてからはメイド服とパジャマ以外は必要なかった。

一度休暇をもらって外出したが、そのときも自作したワンピースで間に合わせた。

となると……。生まれて初めて、自分のための洋服を買いにきたことになる。

こんな女の子はきつとほかにいないだろう。

しかし咲夜は、それを別におかしなことだと感じることはなかった。咲夜の人生の中で、衣服で迷う暇なぞ、なかったからである。

「和服……。うーん、和服もギャップを感じさせてよさそうだけど……」

コーディネーターが、一般的な幻想郷の女性が来ている服装を、かなり豪華にしたような感じの衣装を持ってきた。

「せっかくいいスタイルなのに、目立たなくするのはもったいないわね……。それに和服だと巫女さんとかとかぶりそうだし」

と、結局合わせただけでそれも仕舞いこんでしまった。

（ああっ・・・もうっ！）

だんだん咲夜はいらついてきた。

スピードスピード、そしてスピード。

その上でミスのない完璧な仕事をこなす。

それをモットーに仕事をしている咲夜には、この服を選んでいる時間というのはどうしても無駄な時間に感じられて仕方なかった。

「あゝもゝ。あの白いのでお願いします」

じれた咲夜はヤケ気味に、店の角に置かれていた一着のドレスを指さす。

いろんなドレスをあてがわれたが、咲夜にはどれも同じように感じられた。

それなら一番オーソドックスな白でいいではないか。

「え・・・？あのドレス、ですか？」

「そう。もうあれでいいわ」

「・・・かしこまりました。では採寸をお測りして、十六夜さんに合わせたサイズのことをミスコン当日にお届けする、ということですよ、よろしいですか？」

自分の仕事を途中で中断させられたにもかかわらず、なぜかコードイネーター満面の笑み。

「いいわよ、それで」

「では着付けも私が担当させていただきます、ということ」

「ええ、それをお願いします」

「かしこまりました。では十六夜さん、こちらでサイズをお測りします」

咲夜はコードイネーターに案内されて、採寸室へと足を運ぶ。

ついでに水着もお任せで新調しておくことにした。

決勝まで進出すれば、必要になる。

遊びのようなイベントであることは咲夜も十分承知していたが、優劣がつく以上、負けたくない。

咲夜という少女はクールな外見に似合わず、結構熱いところもある少女なのだ。

それに、水着を着る決勝まで進まないと、肝心の『疑惑』が晴らせない。

それではミスコンに出場する意味がないではないか。

さて、ミスコン当日。

会場はなぜか、博麗神社だった。

『第二回ミス幻想郷コンテスト』という横断幕がでかかと張り出され、神社の境内には出店や屋台が軒を連ね、たくさんの見物人（8割が男性だ）が訪れている。まるで祭りのような賑わいだ。

「はい、ミスコン出場者の予選受付はこちらですよ」と、若い女性が声を張り上げている。

長蛇の列・・・というほどでもなかったが、それでも結構な人数の女の子がその受付に列を作っていた。

ミスコンに出よう、という女の子ただあつて、列を作っている女の子たちは、それなりにかわいかったり、綺麗だったりする娘ばかりだ。

彼女たちはそれぞれ写真のついた書類を手にもって列に並んでいる。

ミスコン出場者の一人の書類を覗いてみよう。

名前：皇 香奈子

年齢：10代後半

特技：お料理・お洗濯・お裁縫

趣味：ウインドーショッピング・編み物

過去の受賞歴：おらが村小町に選出。

投票者へのアピール：出場する女の子たちはみんなかわいいので、私はそんなに目立たないかもしれないけど、精一杯がんばります！

なかなか健気な内容である。

添付されている写真も、可愛げのある可憐な笑顔で、この笑顔で微笑まれたらたいの男性は何でも言うことを聞いてしまいそうだ。

予選は写真のついた書類を提出し、それを張り出して観衆みんなに見てもらう。

で、観衆に気に入った女の子に票を入れてもらい、上位何名かが本戦に進出するシステムだ。

さて、咲夜の受付の番がやってきた。

受付嬢をやっていたのは、なぜかこの神社の巫女・博麗霊夢だった。
「・・・何？あなたも出るわけ？」

いぶかしげな顔をする霊夢。

「そうですよ。それがなにか？それより私はこの神社でやる意義のほうを聞きたいのだけど」

面白くなさそうに答えて、嫌味っぽく言い返す咲夜。

「そんなの、人が集まるからに決まってるじゃない。その分、お賽銭も潤うってことよ。スポンサーもついてるし。私もミスコンに出場するし」

「あなたも？」

「そーよ。優勝者にはスポンサーから目録が出るもの。この神社、あんまり儲かってないからすこしでもお金はほしいところね」

「・・・出場するなら何でこんなところで受付なんてやってるのよ？去年上位で予選は免除なの？」

「去年は出てないわ。そこは主催者特権ってヤツよ」
「・・・」

まあ、なにいつても仕方ないような気がした。

咲夜はとりあえず選考書類を霊夢に渡す。

「はいはい、十六夜咲夜さんね。えーと・・・」

霊夢は渡された書類に目を通した。

名前：十六夜 咲夜

年齢：10代後半

特技：ナイフによる全距離適応戦闘・狙撃・偵察任務・妖魔退治

趣味：弾幕・チェス

過去の受賞歴：年間妖魔退治リーディング1位・狙撃コンテスト優勝・ナイフ投げコンテスト女性部門優勝・ナイフ近距離戦闘大会男女混合部門優勝

投票者へのアピール：過去の戦闘による負傷はなし。内臓疾患は抱えていない。きわめて健康。以上。

「……………」

これは一体、何の履歴書なのだろう。

霊夢にはこれがミスコンに応募する書類の内容とはとても思えなかった。

「ってか、あんたは宗介か。」

「あ……………。咲夜さん。ここは軍隊の傭兵募集所じゃないんだけど。それになんなの、この写真。ほんとにこの写真をミスコンの预选に出すわけ？なんか、ほとんど顔面神経痛なんだけど」

顔面神経痛は言い過ぎにしろ、書類に添付されている写真は明らかに不自然な笑顔だった。

「こう、なんと言つか…………。背後に銃を突きつけられて無理矢理笑っているような、そんな感じの笑顔だ。」

「う…………。仕方ないじゃない。何回撮りなおしてもそれが精一杯だったんだから」

咲夜だって笑わないわけではない。

仕事で獲物を仕留めたとき。

弾幕で敵を叩き落したとき。

お嬢様に料理をほめられたとき。

そんなときは咲夜も、もちろん笑う。

しかし、咲夜の人生の中で作り笑いが必要だった場面は、まったくなかった。

商売することもなかったし、男性に媚を売ることもなかったのだから。

「まあ、いちおう書類は受け付けるけど。結果はあんまり期待しないほうがいいんじゃないかな・・・」

何か気の毒そうな顔をしながら、霊夢は咲夜の提出した書類にぼんと了承の判を押したのだった。

続く

私の胸はPADじゃない！第二話（後書き）

いつもご愛読くださり、ありがとうございます。

私が物語をこまめに区切るくせがあるのは、長くして読みにくくなってもなんだなあ、というのがありますが、妄想がわいてこなくなつて話が途切れてしまったときにまた練り直す期間がほしくて区切る、というのが一番大きな理由だったりします。

少し長くなりますが、私の咲夜観について。

私の小説に登場する咲夜さんは、とても女の子らしいとは思えませぬね（容貌はたいがい美しい少女、というのを強調して描いているつもりですが）。

違和感を感じられるかたも、多いと思います。

でも、紅魔郷のおまけを読んだりした限り、どうも咲夜さんは衣服や装飾品に興味を持ったり、友達と旅行にいたりして楽しんだり、男性に媚を売るタイプの女の子ではないような気がしています。

それに、その女の子らしくないキャラが『女の子らしさ』を意識する、というのは、単に私の嗜好の問題ではありますが、結構好きなシチュエーションです。

これからも私の書く咲夜さんは、こんな感じだと思います。

美しくて、強くて、ちょっと鈍感で、ちょっと抜けてて可愛くて。

でも、共感してくださる読者様も、多いのではないのでしょうか。利に敏くてブランド物や男アサリに精を出す咲夜さんを見たいなんて読者様は、少ないでしょうか（笑）。

よろしければ私の妄想に、もう少しお付き合いください。
では近いうち、次回作でお会いしましょう。
感想批評、お待ちしております。

東方プロジェクト本元

上海アリス幻楽団様：<http://www16.big.or.jp/~zun/>

参考にさせていただいたゲーム

東方妖々夢・東方紅魔郷・東方緋想天

シューティングが苦手な方でも楽しめるゲーム（かく言う私も東方が気になってファ

ミコン以来久しぶりにシューティングで遊びました。面白いですよ）
ですので、気に

なった方はぜひ、プレイしてみてください。

緋想天は黄昏フロンティア様（<http://www.tasofro.net/>）が手がけていらっしゃる弾

幕型格闘ゲーム（?）です。

こちらはネット対戦もできて大変盛り上がっています。
こちらもぜひ、プレイしてみてください。

私の胸はPADじゃない！第三話（前書き）

すみません。

思ったより長くなりそうなので、前・中・後ではなく、第○話方式に変更しました。

最終話は第○話ではなく、最終話とタイトルさせていただきます。

本作品には相当なキャラ崩壊要素が含まれています。

ご自身がお持ちのキャラ観を大切にしたい人はお読みにならないほうがよろしいかと思います。

あと、小説の内容についての批評は承っておりますが、私のキャラ観についての誹謗中傷はご遠慮くださいますようお願いします。

私の胸はPADじゃない！第三話

ミスコンに参加した女の子たちの書類が集計され、係員たちによってその書類が掲示板に張り出される。

さすがにミスコンに応募してみよう、という女の子の集まりなだけあって、被写体の女の子はどの子もこの子も平均をはるかに上回る容姿の持ち主ばかりだ。

ちなみにこの子達の写真を撮ったのは『文々。新聞』発行元の射命丸文だった。

ミスコンの運営を手伝う代わりに、このイベントに関する新聞への掲載権を独占しているらしい。

「この子もかわいいなあ」

「えゝ。絶対こっちの子の方がかわいって」

「女をみる目のないやつばかりか、ここは。この子が一番に決まってるだろ」

と、張り出された書類を見ながら、好き勝手に論評していく野次馬の男性たち。

全体の2割ほど女性の投票者もいて、彼女たちは女性独特の観点から、投票する女の子を決めているようだった。

さて、こちらは参加者控え室。

女の子たちは出されているお茶を飲み、お菓子をつまみながら談笑に興じている。

競技場にありがちな、ピリピリした感じはまったくくない。

このあたりが、実に幻想郷らしいといえた。

咲夜はそんな女の子たちの談笑の輪に入ることもなく、用意されていたイスに腰掛け、どこをみるでもなくボーっとしていた。

予選を突破したら本戦の第一回戦は普段着で笑顔を競う、ということだったので、今日の咲夜の衣装は、いつものかつりタイプのメイド服である。

咲夜は基本的に、自分の容貌に対して無関心であるし、深く考えたこともなかった。

小さいときは、『かわいい女の子だ。将来はきっと美人さんになるよ』なんていわれていた。

しかし、それぐらいのほめ言葉は女の子であれば誰だって、ある程度の年齢までは聞くものである。

普通の女の子なら初恋をしたり、ちょっと男の子にときめきを持ったりする第一次思春期にはあんなことがあり、その無念を晴らすために修行に明け暮れていた。

少々色気も出てくる第二次思春期の真っ只中には、狙撃銃を握りしめ、銀の弾丸を化け物どもに撃ち込み、とどめにナイフを投げている。

レミリアに負けてからこっちは、ずっとメイド生活である。

咲夜は間違いなく特一級の垢抜けた美少女であったが、どの局面でも自分の容姿が有利に働くことはなかった。

美少女だからといって狙撃の精度が上がったり、化け物どもが手加減してくれたりしたことはなかったのである。

容姿に関して思い出は、ひとつだけ。

紅魔館でメイドになったとき、『あなたのその左右のみつあみ、かわいいわね』とレミリアに褒められた。

幻想郷に来てからこっち、咲夜にかわいい、といってくれたのはレミリアだけだった。

レミリア以外の人間や妖怪と、接することがなかったからである。

咲夜は自分で自分を美しい、なんて思ったこともない。

そんなことを意識している暇なんて、なかった。

（じゃあどうして、こんなイベントに参加する気になったのかしら）
PADであろうとなかろうと、言いたいやつには言わせておけばいいのである。

それで、自分に実害があるわけでもない。
でも、面白くない。

どうしてもそれは、面白くないのである。

なぜ面白くないのか、説明するのは非常に難しい。

こんな感情は初めてだ。

感情のコントロールには自信があったのに。

そうでないと、化け物とはいえ人語を話し、感情も持っているものの頭を、狙撃銃で無表情には吹き飛ばせないものである。

「参加者のみなさん。投票の集計が取れましたので、結果発表しますね」。境内に集まってください」

係員が参加者たちを呼びに来たようだ。

ほかの参加者たちに混じって、咲夜も境内の広場に足を向けた。

広場は投票した人たちやミスコンを見に来た野次馬たちで、かなりごった返している。

「はい、皆さん。投票の集計が終わって結果が出ました」

腋巫女霊夢が今度はなぜか、舞台の上で司会役を務めていた。

ひよっとしたら、受付嬢や司会を雇うだけのお金がなかったのかも
しれない。

スポンサーは出してくれなかったのだろうか。

それとも、こういう狙いなのだろうか。

「えゝゝゝ投票結果の上位3名が、本戦出場の権利を得ます。あ、ちなみに私もミスコンに参加していて、主催者特権で本戦出場が決まっています。異論は認めません」

なんというか、豪快な巫女である。

ここまでストレートに来られると、投票者も参加者も、苦笑するし
なかった。

「えゝゝゝでは第三位。ショートカットがかわいい、と大絶賛された飲食店勤務の橘鏡香さんです。さ、橘さん、舞台へどぞ。みんな拍手ゝ！」

彼女は幻想郷の人里にある、一軒の飲食店で働いている普通の女の子だった。

テレながら彼女は舞台上がり、愛想笑いを浮かべながら観衆に手を振ったりしている。

「次に第二位！長髪ブロンドはオトコの浪漫だぜ！と男性の人気を集めた、普通の魔法使い、霧雨魔理沙さん！」

ちよつとちくり、とした視線を向けて、霊夢は魔理沙を手招きした。そんな霊夢の視線に魔理沙は気づくこともなく、くるくると器用に箒を回しながら、満面の笑みで舞台上がる。

「ゝゝゝそーいやあなたも出場してたのね」

いやそーに小声で言う霊夢。

「おう。魔法の研究って奴には結構金がかかるんだ。優勝してばっちり目録頂くぜ」

魔理沙は霊夢の嫌味などまるで気にせず、ウイंक飛ばしてサムズアップを彼女に向ける。

これもまた、豪快な女の子だ。

その辺も、彼女の人気のある理由なのかもしれない。

「そして第一位！栄えある予選第一位は、驚きの参加を決めてくれた紅魔館の瀟洒なメイド、十六夜咲夜さんでした！」

わあっ！とひととき大きな歓声と拍手が、境内で巻き起こる。

「ゝゝゝゝゝ？わたし？」

3位に呼ばれなかった時点で、あきらめていたのだが。

写真を見る限り、どの子もみんなそれなりに垢抜けた容貌をしていた。

それなら上手に笑った写真を撮った人が上位に来るだろう、と咲夜は踏んでいた。

そして自分の写真は、お世辞にもみんなのように、愛嬌のある笑顔だとは思えなかった。

「さあ、咲夜さん。こちらへどうぞ」

微妙な笑みを浮かべながら、霊夢が咲夜を舞台に招く。

咲夜は首をかしげながらも、とりあえず壇上に上がった。

「・・・よくあの軍隊の履歴書みたいなので、予選トップ通過したわね」

霊夢が咲夜にこそつと耳打ちする。

「・・・単に知名度のおかげじゃないの」

何の感慨もなく、咲夜は答えた。

結局上位3人のうち、『普通の女の子』は3位の橘という女の子だけだった。

咲夜も魔理沙も、幻想郷では『超』のつく有名人だ。

もちろん、今司会をやっている腋巫女も。

（それだけじゃないと思うけどね）

霊夢は端正な咲夜の横顔を見ながら、ほんの少し羨望の混じったため息をついた。

霊夢からみても、咲夜は本当に垢抜けた、瀟洒な美少女だと思う。何もあんな物騒なところでメイドなんてやってないで、普通に暮らしたらいいのに。

咲夜ほどの美貌の持ち主がその気になれば、幸せを手に入れるのはそれほど難しくないだろう。

まあでも、それは彼女の『生き様』に合わないのかもしれないな。

霊夢は自分の立場を鑑みて、そう思うのだった。

本戦から前ミス幻想郷の八意永琳が参加するものと思っていた予選通過者たちだったが、『スポンサーの意向』とやらで、本戦第一位が永琳との決戦に挑む、という挑戦手合い制に変更されたらしい。まったく、大人の世界というヤツは複雑なのである。

本戦では普段着で笑顔を競う、ということだったが、実際にはちょ

つとしたパフォーマンスを披露して、それを観客に見てもらう、という少し隠し芸大会じみた選考方法だった。

主催者特権で予選を無視した腋巫女霊夢は、博麗神社に伝わる巫女の舞を披露した。

3位の女の子は特技の料理を生かして、りんごの皮の早剥きを披露した。

ほんの1分で2つのりんごをきれいに剥いたのだから、これはこれでたいしたものである。

2位の魔理沙は得意の魔法を生かして、昼間でもきれに見える打ち上げ花火を披露した。

どれも拍手喝采ものであった。

さて、いよいよ予選を第一位で通過した、咲夜の番である。

「さあ、予選を第一位で通過した、十六夜咲夜さんの登場です！」などと、また司会に早変わりした霊夢がアナウンスする。

（私も何か、料理でパフォーマンスしようと思ったのになあ・・・）

こう見えて・・・という失礼かもしれないが、咲夜は料理が最大の得意である。

最近は創作中華に凝っているらしい。

しかし、同じようなことをやるのも、芸がない。仕方ない。

「魔理沙さん。それと司会の霊夢さん。少々手伝っていただけますか？」

咲夜はなぜか丁寧な敬語で二人を指名すると、ミスコンの書類に添付されていた写真とは比べ物にならないくらい、明るい笑みを二人に向けた。

その笑みに、普通の魔法使いと腋巫女はなぜか、戦慄を覚えたのだった。

で、その戦慄は現実になった。

「・・・ちよ。ほんとにするの？」

「信用してないわけじゃないが。ま、マジデ頼むぜ？」

わずかに恐怖で震える声を上げる二人に、咲夜はただただ微笑むだけ。

世界最高の微笑の絵画といわれるモナリザもびっくりの、綺麗な微笑である。

霊夢と魔理沙は舞台の端っこで丸太に縛り付けられていて、その頭の上にはお皿に乗ったりんご。

さらにかなりはなれた反対側の端には、咲夜の姿。

もう、わかりだろう。

咲夜お得意の、投げナイフの技を披露するつもりである。

「間違つても額とか頭とかに当てないでよね！」

叫ぶ霊夢にも、咲夜は微笑を返すだけ。

本当は頭や頸動脈、心臓を狙ったほうが簡単（ハンター時代に慣れているから）なのだが、それは黙っておくことにした。

「・・・なあ」

ほとんどまな板の上の鯉状態の魔理沙が、小声で霊夢に話しかける。
「なに？」

「あいつのスペルで、ナイフがランダムで飛んでくるやつ、あっただろ」

「え」と。『エターナルミーク』だっけ？」

「それ。あれ、あいつヤケクソできとーにナイフ投げているだけらしいぞ」

「そんなこと、別に今聞きたくもなかったわ・・・」

と、なんだかんだ言いながら協力するところが、二人のいいところではある。

一応咲夜を信頼しているのか。

それとも単にお人よしなだけなのか。

「お二人さん、動かないでね」

咲夜は息を整え、胸の前でこぶしを作り、瞳を閉じて精神を集中させ始める。

その様はまるで世界タイトルマッチに挑むボクサーか、名人戦に挑む棋士のようなだった。

「動かないで・・・そう・・・いい子ね・・・」

いったん見開いた咲夜の大きな瞳が、すっ・・・と細くなる。

ガータリングに常備している二本のナイフを取り出し、利き手で握る。

ナイフを取り出したときに見えた咲夜のきれいな白い太ももに対して上がった、男性たちの「おお・・・」という感嘆の声は、咲夜の耳に入らなかった。

そして、堂にいった動作で投擲姿勢に入る。

その瞳には、一言では言い表せない、静かな狂気が宿っているような気がした。

（な・・・なあ。あいつ、まさかあたしらの急所狙ってないだろう？なんか、すげー怖い。ってか、殺気を感じるんだけど）

動かないように、ヒソヒソ声で霊夢に話しかける魔理沙。

（ベ・・・別に恨まれるようなことはしてないし・・・。まあ、大丈夫でしょ。彼女の投げナイフの腕って、20間（およそ36メートル）離れた、頭上にりんごを載せた妖精メイドの、額に当てることができるって聞いたことが・・・）

（・・・それって結局外したんじゃないのか・・・？）

二人が小声でそんなやりとりしていると。

「はっ！」

まさに一閃！

咲夜の手元が煌いたかと思うと、二本のナイフが同時に、超高速で解き放たれる。

そして二本のナイフが途中で左右に分かれると・・・次の瞬間には魔理沙と霊夢の頭の上のりんごに命中していた。

二人がまばたきする暇さえなかった。

それも、ただ命中しただけではない。

どういうテクニクなのか、ナイフが刺さったりんごはきれいに6等分され、パツと皿の上に切り開かれている。

まるで手品か魔法だ。

あまりの光景に静まり返る境内。

ハンター時代に同業者や妖魔どもから『クインオブナイフナイフの女王』と呼ばれていたのは伊達ではない。

咲夜は何事もなかったかのように、驚愕と恐怖に目を白黒させている二人に近づいた。

それから優雅に一礼して、切り開かれたりんごに乗った二人の頭の上の皿を両手に取る。

自分に関する新聞への失礼なインタビューは、これでチャラにしておいてあげることにした。

そして舞台のすそまで来ると、瀟洒にひざまづいて、前列の観客に「おひとついかが？」なんて12切れある左右の皿のりんごを勧めている。

10人の男性と2人の女性がおそろおそろ手を伸ばして、完璧に6等分されたりんごを左右の皿から一切れずつ手に取った。

咲夜はソールドアウトした皿を満足げに眺めると、空になった皿を舞台に置き、今度は観客に向かってお辞儀する。

メイド服のスカートをすそを握った、ちよつと気取ったポーズで。博麗神社の境内は、割れんばかりの大拍手に包まれたのだった。

続く。

私の胸はPADじゃない！第三話（後書き）

あとがき長文注意。

いや、思ったよりも長くなってしまいました。

これでもうこいつの妄想に付き合わなくてすむ、と思っていた方、サーセン（笑）。

ミスコンに登場させる女の子はかなり迷いました。

某巨大SNSで人気になっていく順に登場させるか。

それともまったく関係のない女の子を登場させるのか。

いろいろ悩んで結局、妖々夢で主人公を張った3人がからむ形が一番いい、と判断しました。

みんな一応、人間の女の子ですしね。

あと、本文はかなりおかしい日本語を使っている部分もあります。たとえば……。

咲夜は本当に垢抜けた、瀟洒な美少女だと思う。

（本文より抜粋）

瀟洒、という言葉にはもともと『垢抜けた』という意味があるので、この日本語はおかしいですね。

でも『瀟洒』という単語は東方シリーズではほとんど咲夜のためだけに使われている褒め言葉であり、咲夜を表す一つの記号と割り切って、あえて、この文体にしました。

突っ込まれる前に、自分で突っ込んでおきます（笑）。

ちなみに私、瀟洒なんて瀟洒な日本語、東方を始めるまで知りませんでした。

東方二次創作を始めるに当たって、あわてて辞書で調べましたよ。
知らない言葉は、使えませんか（笑）。

ちよつと話は変わって。

某動画サイトに『咲夜さんが好きすぎる人』というジャンルが見受けられるのですが、きつと私もその一人だと思います。
好き過ぎないと、二次創作なんてかけませんかね。

しばらくは咲夜さんの二次創作を楽しんで書けそうです。

たぶん、次で最終話にできると思っんですけどね・・・。
頭に沸いてくる妄想しだい、といったところでしょうか。

こうしていい加減に書けるのも、アマチュアの気楽さです（苦笑）。
もうすこし、私の咲夜ワールドにお付き合いください。

近いうちに、またお会いしましょう。

感想批評、お待ちしております。

東方プロジェクト本元

上海アリス幻楽団様：<http://www16.big.or.jp/~zun/>

参考にさせていただいたゲーム

東方妖々夢・東方紅魔郷・東方緋想天

参考にさせていただいた書籍

東方求聞史紀

シューティングが苦手な方でも楽しめるゲーム（かく言う私も東方が気になってファミコン以来久しぶりにシューティングで遊びました。面白いですよ）ですので、気になった方はぜひ、プレイしてみてください。

緋想天は黄昏フロンティア様（<http://www.tasofro.net/>）が手がけていらっしゃる弹幕型格闘ゲーム（?）です。

こちらはネット対戦もできて大変盛り上がっています。

こちらもぜひ、プレイしてみてください。

私の胸はPADじゃない！第四話（前書き）

本作品には相当なキャラ崩壊要素が含まれています。

ご自身がお持ちのキャラ観を大切にしたい人はお読みにならないほうがよろしいかと思えます。

あと、小説の内容についての批評は承っておりますが、私のキャラ観についての誹謗中傷はご遠慮くださいますようお願いします。

私の胸はPADじゃない！第四話

予選通過者及び主催者特権で予選を無視した霊夢のパフォーマンスが全部終わり、観客たちによる人気投票が行われた。

票は係員によつてすぐに集計され、一刻後には結果が出た。

「えゝゝゝ本戦投票の結果が出たようです。司会の私も参加しておりますので、実は私も結果を知りません」

もうすっかり司会が定着した霊夢であった。

その手には蠟で封じられた一通の封筒が握られている。

「投票結果一位の人が前回のミス幻想郷、八意永琳さんと決勝を競うことになります。一位は私だといいなあゝゝゝさて、封を切ります！」

そう宣言し、霊夢は封筒の封を切った。

そして中から一枚の、四つに折られた半紙を取り出す。

「第一位はゝゝゝ！」

霊夢は半紙を左手に持ちかえ、自分にも観客にも見えるように勢よくそれを振りかざし、四つ折りにされていた半紙を開いた。

達筆な毛筆で書かれていた人気投票第一位の女の子の名前はゝゝゝ。

「十六夜咲夜さん！くゝゝ！私じゃなかったか。まあ、仕方ないわね。十六夜さん、おめでとうございます！」

負けたことをまったく感じさせない、本当に祝福するような笑顔で、霊夢は咲夜を壇上に招いた。

同じく選ばれなかった魔理沙も、唯一普通の女の子として3位に残った橘も、彼女なら納得だ、といった感じで、笑顔で咲夜に拍手を送っている。

「ゝゝゝ私が」

少し信じられないような思いで、咲夜は結果を聞いていた。
あのパフォーマン스가よっぽど観衆の心をつかんだのだろう。

やっぱり、自分が一番得意とすることを披露してよかった。

少し照れたような顔をして、咲夜は壇上へ上がった。

「おめでとうございます！まだ決勝があるとはいえ、たくさんの参加者の中から一位に選ばれた感想を一言」

そう質問する霊夢は、少し意地悪な顔をしていた。

咲夜がこのようなシチュエーションに慣れていないのを、からかっているようだ。

「え・・ああ。まあ、光栄です。決勝でもがんばります・・・」
ちよつとあたふたして、定跡どおりの答えを返す咲夜。

世間が抱く『十六夜咲夜』のイメージとは違う彼女をみて、観衆たちから微笑ましい視線が咲夜に注がれる。

そんな視線を感じた咲夜は居心地が悪くなったのか、「も、もういいかしら？」と小声で霊夢に問いかける。

霊夢は苦笑いを浮かべながらうん、とうなずいたのだった。

決勝進出者には、個室の控え室が与えられた。

決勝ではパフォーマンズ用の衣装の着替えと、水着の着替えが必要だからだ。

貧乏しているとはいえ、神社は神社である。

いくつかの部屋ぐらいいは、用意できるようだった。

「・・・・・」

与えられた個室に入室した咲夜は、用意されていた衣装ドレスを見て、自分が敗着級の悪手を指したことに気がついた。
これがチェスなら、もう早々に投了している。

自分が選んだあの白いドレスは、こういうドレスだったのか・・・。

咲夜の決勝進出のうわさを聞きつけてやってきた紅魔館の主レミリアも、その衣装を見てニヤニヤしている。

「十六夜様がお選びになったドレスを我々が全身全霊を込めて、十六夜様のように完全に瀟洒に仕立て上げました。ささ、着替えましょう！」

あの例のコーディネーターが、満面の笑みで咲夜に催促する。

「・・・ほかに替わりはないですか・・・」

弱々しく声を漏らす咲夜に、コーディネーターは

「ごいません」

とあっさり切り捨てる。

このコーディネーター、割と綺麗な顔をしているくせに、結構な食わせ物であるようだった。

「いいじゃないの。似合うわよ、きつと」

面白そうに言うレミリア。

「うっ・・・」

と、うなり声を上げて頭を振る咲夜だったが、決勝まで進出しておいて、いまさら衣装を理由に棄権、というわけにもいくまい。

しかも、曲がりなりにも自分で選んだドレスなのだ。

指してしまった悪手は仕方がない・・・。

「じゃあ、着替えます・・・」

咲夜はあきらめたようにつぶやくと、着替えるためにメイド服の胸元に手をかけ、リボンを外した。

「きゃあああっ！似合う、似合いすぎです！私の眼に狂いはなかったわ。絶対似合うと思ったから、あの時止めなかったのよねえ」

感激の面持ちでコーディネーターは今しがた自分がコーディネーターした咲夜を眺めて、そんな叫び声を上げた。

「本当ね。あとは相手がいればそのまま結婚出来ちゃいそうね」

と、レミリア。

「・・・冗談を」

すでに薄笑いを浮かべるのが精一杯の咲夜。

そう、咲夜が図らずも選んでしまった白いドレスは、実はウエディ

ングドレスだったのだ。

ご丁寧に、ヴェールとブーケまで装備させられている。

そうと知っていれば、絶対に選ばなかったのに。

婚前にこの手のものを着ると行き遅れる、なんて迷信を咲夜は信じていなかったが、年頃の女の子としては、微妙な気持ちにならざるを得なかった。

「咲夜さんのような美しい女性を娶られる男性は、本当に幸せ者でしょうね。さ、十六夜様。本番の結婚式だと思って、今からがんばりましょう！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そんなの、恥ずかしすぎる。
頼む。

誰か狙撃銃でも弾幕でもいいから、私の頭を今すぐ撃ち抜いてくれ。手の届くところにナイフがあったなら、羞恥のあまり、自分の胸を刺し抜いていたかもしれない。

残念なこと（？）に、ドレスに合わせた白いストッキングの装着はしているものの、コーディネーターとレミリアの『ナイフを装備している新婦なんていない』のひとことで、いつもガーターリングに装備しているナイフは取り上げられていた。

別に自分は新婦でもなんでもないのだが。

「もうあきらめなさいよ」

背伸びしてばんぼん、と咲夜の肩を叩きながらレミリアが面白そうに言う。

レミリアに言われたのでは仕方ない。

「そうですね・・・」

と気のぬけた返事をして、咲夜は自分の出番を待つことにした。

「目録もらえる目がなくなっただので、ちょっとやる気ダウンの私で

すが、ミスコンのほうはいよいよ大詰め！」

本音ちら見せの霊夢のアナウンスにもめげることなく、観客はおおおお！と大歓声を張り上げる。

日も暮れてきて、いかにもクライマックスな感じだ。

魔理沙以下、数人の魔法使いたちが境内のあちこちに明かりを灯してくれて回っている甲斐もあり、境内も舞台上も、昼間と変わらない光量を維持できているようだった。

「さて、いよいよミス幻想郷もファイナルです！では、ご登場願いまししょう！最初にドレスでパフォーマンスを披露してくれるのは、初代ミス幻想郷・八意永琳さんです！」

今までで最大の拍手と、群集の一部からの「えーりん！えーりん！」の大合唱。

その一部の群集は、なぜか掛け声を上げるとき、「えー」で右腕を振り上げ、「りん！」でそれを振り下ろしている。

何かのまじないなのだろうか。

さすがに初代ミス幻想郷だけあって、手を振りながら笑顔で現れた八意永琳はこの世のものとは思えないほど（まあ、月人ではないか、といううわさもあるぐらい）、完璧なかんばせの、恐るべき美女だった。

10代の女の子には到底出しえない、大人の女性の色香。

スタイルも惚れ惚れするほど抜群である。

今の永琳のいでたちは、いつものチェス盤みたいな変わった服装とは違い、薄手の、太ももが丸見えになりそうな深いスリットの入っている、ド派手でセクシーな、赤が基調で竜と兎の刺繍まで入っているチャイナドレスだ。

一部で「おっぱいえーりん」と呼ばれているのは伊達ではなく、薄いチャイナドレスの上からの永琳の胸囲は、それは凶暴なものだった。

つてか、ありていに言ってエロい。

深い意味はわからないが、「はさんでみてえ」という、男性の謎の

うめき声も聞こえてくる。

「わはー。今回も大人の魅力全開の永琳さんです！今日はどのようなパフォーマンスを披露してくれるのですか？」

霊夢がマイク（のようなもの）を永琳の前に差し出すと、永琳は魅惑の微笑を浮かべ、

「今日はオリジナルの太極拳を披露しようと思っているわ」と答える。

「決勝に進んできた咲夜さんの印象は？」

「幻想郷にはかわいい女の子が多いから、誰が来ても面白いコンテストになる、と思っていました」

なんというか、大人な回答である。

「永琳さんは個人的に、咲夜さんと・・・」

「つと、そろそろ始めていいかしら？」

霊夢の質問を途中でさえぎる永琳。

（あまり触れられたくないのかしら・・・？）

気にはなったが、霊夢はそれ以上突っ込むことを止めた。

永琳の披露した太極拳は、ゆっくりな動きではなく、まるで力強い動きの永琳を見ているうちに観客は気づいたのだが、あのチンフー映画のような激しさも取り入れた、やや前衛的なオリジナルのものだった。

激しい動きの永琳を見ているうちに観客は気づいたのだが、あのチャイナ服のスリットは相当深いらしく、ほとんど脚の付け根までが露出して、下着が見えてしまいそうなほどセクシーなものだった。

男性の観客たちの騒ぐまいことか。

当然、女性の観客たちの反応はもうひとつよくない。

『あざといよね』『よっぱど自信があるのね』

とまあ、そんな感じだ。

もちろん当の永琳は、そんなことは意に介さない。

投票する観客は、男性のほうが多いのだ。

それなら男性の心をつちりつかんだほうが、勝ちやすい。

副作用よりも効能のほうが大きければ、そちらの薬を使用する。
それだけのことだった。

最後に大きくジャンプして、華麗に着地を決めて決めポーズ。

そして優雅に一礼。

男性の観客からの熱狂的な拍手と、女性の観客からのとりあえずの拍手が博麗神社の境内を包み込む。

「以上、永琳さんのパフォーマンスでした。すばらしい舞曲を披露してくれた永琳さんに、もう一度盛大な拍手をお願いします！」

霊夢が促すでもなく、拍手は間断なく永琳に送られていた。

永琳はそんな観客の様子を満足げに見渡し、手を振りながら舞台から退場する。

「さて、いよいよ激戦の予選・本戦を勝ち抜いてきた、十六夜咲夜さんの出番です。咲夜さん、どうぞ舞台へ！」

純白のドレスに身を包み、少し硬い表情で現れた咲夜に観客たちは・
・。

続く。

私の胸はPADじゃない！第四話（後書き）

すみません。

終われませんでした！

4000字を越えたので一応ここを区切りにしました。

私はもちろん咲夜さんファンなのですが、えーりんも大好きなのですよ。

うん、大人な感じがいいですね。

SS書いてて、ちょっと寂しいこと。

某動画サイトなんかを見てみると、『やっぱり活字は視覚情報（イラストとか）には勝てないのかなあ・・・』なんて思ってしまったります。

あちらは何万何十万単位で視聴されていますからね。

もちろん面白いものはメディアを超越するので、活字のせいで読んでもらえる人が少ない！なんてのは言い訳にもならないのは重々承知しているのですが・・・。

まあ、私自身が楽しんで書いているので、それを理由に書くのをやめる、ということはありませんけどね。

一体いつまで続けるのかなあ・・・。

もう『次が最終話！』予告はやめにします。

読者様には薄ら笑いでも浮かべながら、最後まで私の妄想に付き合ってくださいとうれいす。

ではまた、近いうちにお会いしましょう。

あと、表立って感想とか書きにくいけど、ちょっと応援がてらに感想書いてやるか、という方がいらっしゃったら、こちらにメールく

ださい。

基本的にお返事させていただきますが、返事がいない場合は『返信不要』と最後にお書き添えください。

sosuke1234g.live.jp

お手数ですが、をアットマークに変えてアドレスをご使用ください。

東方プロジェクト本元

上海アリス幻樂団様：<http://www16.big.or.jp/~zun/>

参考にさせていただいたゲーム

東方妖々夢・東方紅魔郷・東方緋想天

参考にさせていただいた書籍

東方求聞史紀

シューティングが苦手な方でも楽しめるゲーム（かく言う私も東方が気になってファミコン以来久しぶりにシューティングで遊びました。面白いですよ）ですので、気になった方はぜひ、プレイしてみてください。

緋想天は黄昏フロンティア様（<http://www.tasofro.net/>）が手がけていらっしゃる弹幕型格闘ゲーム（?）です。

こちらはネット対戦もできて大変盛り上がっています。

こちらもぜひ、プレイしてみてください。

私の胸はPADじゃない！最終話（前書き）

本作品には相当なキャラ崩壊要素が含まれています。

ご自身がお持ちのキャラ観を大切にしたい人は、お読みにならないほうがよろしいかと思えます。

あと、小説の内容についての批評は承っておりますが、私のキャラ観についての誹謗中傷はご遠慮くださいますようお願いします。

私の胸はPADじゃない！最終話

純白のドレスに身を包んだ咲夜が、舞台に姿を現した瞬間。

『きゃあああつ！』

男性の観客の感嘆のため息は、女性の観客の黄色い叫び声にかき消された。

ウエディングドレスに身を包んだ麗しき乙女に、自分を重ね合わせたのだろうか。

場所は違えど、結婚（幻想郷ではまだ、祝言というきれいな言葉が使われていたが）というのは乙女にとって憧れであるらしかった。咲夜はここに出てくる前、コーディネーターに『無理に舞台の上で笑顔を作る必要はありません。ただし、できるだけテレだけは出さないように。あとは咲夜さんらしく振舞って、こちらへ戻ってきてください』といわれていた。

「こ・・・これは・・・。うえていんぐどれすですか。さすがの私も、意表を突かれました。えー・・・十六夜さん。その心は？」司会の霊夢も目を白黒させて、咲夜へのインタビューを試みる。

「え・・・あゝ」

まさかこれだけ盛り上がっている観衆を前に、勘違いで・・・ともいえない。

それこそ、『空気読めない』ってやつだ。

咲夜がちらり、と舞台袖を見る。

コーディネーターが『困ったときはこちらを見てください』といていたからだ。

すると例のコーディネーターが一枚の大きな紙（要するにカンペ）を咲夜に向かって掲げている。

そこには・・・。

『私には、心に決めた男性がいるのです。今日はその決意として・・・』

などと書かれてある。

それを見てレミリアが肩と羽根を震わせて笑っていた。

・・・咲夜は『今度紅茶に強力な毒を混ぜ込んでやる。殺せないまでも、多少は苦しめてやろう』と固く決意したのだった。

結局咲夜は、

「服を買った店のコーディネーターさんに、目立つ舞台衣装で、とアドバイスをもらったものですから」

と、手堅く答えた。

不服そうなコーディネーターとレミリア。

知ったことが。

「そうでしたか。いや・・・しかし。うゝん・・・」

まじまじとウエディングドレス姿の咲夜を眺める霊夢。

まあ、似合っていること。

白無垢ならともかく、ウエディングドレスでは東洋人の自分はこのまで似合わないだろう。

（オトコの目つてのは嘘つかないものね・・・）

予選本戦ともに一位で勝ちあがったのは、何も知名度とメイド属性だけではない、ということか。

やっぱりちよつと、うらやましい霊夢だった。

「では咲夜さん。パフォーマンスをお願いします！」

そんなことはおくびにも出さず、司会に徹する霊夢。

咲夜は舞台のすそまでゆっくり歩くと、手にしていたブーケを高く掲げ、そしてそれを比較的女性の観客の多い場所へ放り投げた。

世に言う『ブーケトス』というやつだ。

するとたちまち・・・

「きゃあっ！私の、それ、私のよっ！」

「なにいつてるの、あんたは彼氏もいるでしょ！」

「だからそれが必要なのよ！」

その場は混乱の坩堝と化し、本物の花嫁が投げたブーケより激しい争奪戦が繰り広げられた。

「えと。これでおしまいです」
その光景をあつけにとられてみていた咲夜が、とりあえずそう宣言する。

「ああ、そう。・・・素敵な花嫁姿を見せてくれた咲夜さんに、盛大な拍手をお願いします！」

ブーケ争奪戦を繰り広げている一部の女性観客以外は、美しい花嫁姿の咲夜に惜しめない拍手を送った。

「疲れた・・・」

自室に戻ったウエディングドレス姿の咲夜は、とりあえずイスに腰掛け、深いため息をついた。

ハードにメイドの仕事を一日こなした後でも、これほどの疲労感を感じたことはなかった。

「さあ、咲夜さん。疲れている場合ではありませんよ！次はいよいよミスコンのクライマックス、水着ショーですから。こちらが私たちが用意させていただいた水着です」

そうだ。

自分はそのためにここまで勝ち進んできたんだ。

もうちよつとだ、がんばろう。

残りの気力を振り絞り、咲夜はコーディネーターの手にしていた水着を視線を向ける。

「・・・あの」

「はい」

「それが水着ですか」

「はい。当店で一番素敵な水着を用意させていただきました！レミリア様も大絶賛！」

「なんとなく、ただのヒモに見えるんだけど」

そう、コーディネーターが用意した水着はなんというか・・・ほとんど裸に近いような、大胆とかそういったちゃちいレベルを通り越した、本当にヒモのような水着だった。

それを指摘すると、なぜか急にコーディネーターは涙ぐみ、

「咲夜さん。先ほどレミリア様に今回のミスコンの参加理由を聞かせていただきました。なんでもPAD長という不名誉な称号の汚名を晴らすべく、参加を決意なされたとか」

部屋の外からは、奇怪な笑い声が聞こえてくる。

レミリアに相違なかった。

・・・覚えてろ。

紅茶だけじゃなくてクッキーにも毒を混ぜてやる。

「はあ・・・」

「実は私、水着は普通のワンピースのものを用意させていただいていたのですが、それでは完全に疑惑は晴らせない！と感じ入りまして」

「勝手に感じ入るな」

咲夜のツツコミにもコーディネーター見事にスルー。

「衣装をあつらえたときに咲夜さんのサイズを測った私はもちろん、真実を知っています。しかし、女性にとって自分の容貌に疑惑を持たれていることほど、屈辱的なことはないでしょう！ですから、今こそそれを無知な大衆に思い知らせてやらねばなりません。そこで急遽店に連絡を取り、絶対に疑いを晴らせる水着を用意させたのです！さあ、十六夜様。この水着を着てぜひ、満願大就を果たしてください！」

「あ・・・いや。お気持ちだけで。私はワンピース水着でいいです・・・」

「あ。そのワンピース水着は同じ足で店に持って帰らせたので手元にありません」

・・・。。。

プチ。

咲夜の中で、何かが切れた。
もういい。

毒を食らわばなんとやら、だ。

「分かったわよ！着替えるから少しの間、外に出ててもらえるかしら！？」
どこかが切れた咲夜を前にしても、コーディネーターは満面の笑みで「かしこまりました」と返事して、恭しく一礼し、部屋から出て行ったのだった。

水着に着替えた咲夜を見て、レミリアとコーディネーターお二人の反応。

『・・・・・・・・』

「人に勧めておいて、何か一言ないんですか！？まったく・・・」
そう叫ぶ咲夜。

現在の咲夜は、ランナースハイ状態だった。

もう槍でも鉄砲でも弾幕でも持つてこい、である。

「さて。対戦相手のし・・・いや、薬屋さんは一体どんな水着で出てくるのかしら？」

「いよいよミスコンのファイナル、決勝進出者2名による水着ショーです！」

霊夢が舞台上でそう告げると、観客たちからはひととき大きな歓声と拍手が上がった。

「この水着ショーが終わったあと、皆さんに投票していただき、第二回ミス幻想郷を決定いたします。八意永琳さんの連覇なのか？それとも十六夜咲夜さんの初栄冠なのか？」

いまや会場内は永琳派と咲夜派に分かれてしまっているらしく、『えーりん！えーりん！』の掛け声と『さくや！さくや！』の掛け声と同じぐらいの音量で交じり合っていた。

「うーん。いい感じに盛り上がってまいりました！最初に水着姿を披露してくれるのは、前ミス幻想郷の八意永琳さんです。どぞ！」
霊夢のアナウンスとともに、永琳が笑顔で舞台袖から堂々とした歩様で歩いてくる。

「う・・・うおおおおお!？」

男性の観客からの、大きなどよめき。

「・・・?・・・?・・・?・・・?」

対して、霊夢を含む女性たちは、奇怪なものを見るまなざしを永琳に向けた。

永琳の着ていた水着は・・・一応ワンピースの水着・・・になるのだろうか。

濃い紺色の、極端に露出が低いワンピースの水着なのだが・・・。

なんというか、奇怪なデザインの水着だ。

凶暴すぎる胸には『6-1えーりん』と、なぜかひらがなで名前が書いてある白いゼッケン。

はつきり言おう。

外の世界で『スクール水着』といわれているタイプの水着だった。

幻想郷ではメジャーでないスクール水着だったのだが、やはりこの手の水着には男性心をくすぐる何かがあるらしく、永琳派の男性のみならず、この場にいる男性全員が、永琳のスクミズ姿に興奮しているようだった。

・・・大丈夫か、幻想郷。

「え・・・えー。えーりんさん。その水着は?」

何とか声を絞り出す霊夢。

「かわいいでしょう? 森の道具屋で調達したのよ」

「エ、カワイイデスカ」

霊夢はやたらでかい胸を張る永琳を見て、『バカと天才は紙一重』という慣用句を思い出していた。

「森の道具屋がいうには『この手の水着には絶対にゼッケンが必要』ってことだったから、これを水着のアクセントにしてみたのよ。この数字の意味はよく分からないけど」

・・・やっぱりあいつ、変態なんじゃないの?

「・・・あなた、だまされてませんか?」

「そんなことないわよ。見なさい、男性たちのこの声援を!」

確かに会場の男性たちは何かに取り付かれたかのように『えーりん！えーりん！』コールを送っていた。

やっぱりダメかもしれないな、幻想郷。

「あ・・・まあ、ソウデスネ。では観客の皆さんに一言」

霊夢がマイクを差し出すと、永琳はそれを受け取り、

「私に投票してくれなきゃ、月に替わっておしおきよ（はあと）」
なんてウインクしていたりする。

もちろん元ネタを知らない幻想郷の男性たちは「おおおおー！」と叫ぶばかりだった。

「・・・永琳さんってあんな人だったっけ・・・」

少しは永琳のことを知っている咲夜は、あまりといえばあまりの永琳のパフォーマンスに目を丸くするばかりだった。

まあ、人のことはいい。

とりあえず、自分は目標を果たせるところまで来た。

この水着では、PADを埋め込む余裕はない。

「それでは十六夜咲夜さん、どうぞ！」

霊夢のコールに、咲夜は少し胸を高鳴らせて舞台へ向かった。

咲夜が舞台に出た瞬間、あれだけ騒がしかった観客が一瞬で静まり返った。

（あ・・・あれ？）

ハイテンションで周りが見えてなかった咲夜だったが、その静寂が急に咲夜を現実に取り戻した。

やはり、この水着はおかしかっただろうか。

露出狂のおかしな女だ、とでも思われただろうか。

・・・羞恥と悔恨で頭がおかしくなりそうだ。

涙があふれそうになる。

だめだ。

ダッシュで舞台袖に引つ込もうとした瞬間。

『うおおおおおおっ！』

このミスコンで最大の歓声が、博麗神社内を包んだ。

観客が静まり返ったのは、咲夜の水着姿に引いたからではない。

咲夜の肢体のあまりの美しさに、男性も女性も声を失っただけだ。

驚くほど長い脚。

驚くほど高い腰。

ヴァージンスノーのように白い肌。

くびれた腰。

適度に鍛えられた、細身の美しい肉体。

そして、人工物では決してありえない、わずかに豊満さを感じさせる乳房。

若さという、一瞬の煌きが放つ美。

今の咲夜には、完成されすぎたものののみが持つ、儚さ、もろささえ感じさせる。

性欲など下衆なものを感じさせない、神の寵愛を受けた芸術品のようにバランスの取れたボディだった。

『十六夜咲夜はPADなのか？』などと盛り上がっていた群集は、己の浅はかさを恥じることになった。

「あ・・・いや。すごいスタイルなのね・・・。なんだかんだであなたとは長い付き合いになるけど、知らなかったわ。司会の私も声を失ってしまいました。十六夜さん。どうぞこちらへ」

我に返った霊夢が咲夜を舞台の中心に手招きする。

無意識に涙をぬぐって、咲夜は霊夢のそばにやってきた。

「大胆な水着ですね。やはり、あの疑惑を晴らすため？」

霊夢は芸能レポーターのような、少し下卑た笑みでマイクを咲夜に向ける。

「いえ・・・そういう意図はまったく。コーディネーターさんの選

んだ水着がこれだったものですから。私は被服類については明るくないので、すべてコーディネーターさんに任せていました」

半分うそで、半分本当のことを言う咲夜。

「なるほどねえ。では最後に、観客の皆さんに一言」

咲夜は、ここで言うておくことにした。

ここで言わずに、いつ言おう。

「私の胸はPADじゃない！以上！」

それからすぐに決戦投票が行われ、観客は気に入ったほうの女の子の名前を書き、投票箱へ入れていった。

開票は司会者の霊夢が一票一票手で開いて書かれた名前を発表していくという、時間はかかるが非常に盛り上がる方法がとられた。

「えー……。十六夜咲夜。十六夜咲夜。八意永琳。えーりん。おっぱいえーりん……。まあ、一票にします。さつきゅん。咲夜さん。美乳長……。これも一票にします。えーりん！えーりん！名前二回書いていても、一票は一票ですので」

と、開票されるに従い、どんどんホワイトボードに『正』の文字が増えてゆく。

正の文字数はお互いに追いついたり、追い越したり。

咲夜の水着姿がたくさんの観客の胸を打ったとはいえ、永琳とて並の美女ではない。

前ミス幻想郷ということもあり、固定ファンもいる。

投票数はほとんど互角であるようだった。

永琳は余裕の表情で、咲夜は少々硬い表情で開票作業を見守っている。

「お。さあ、これが最後の一票です！」

霊夢が高々と、その投票用紙を掲げる。

ここまで、ホワイトボードに書かれた『正』の文字はまったくの五分だった。

この一票が、ミス幻想郷の行方を決める。

「運命の一票に書かれた名前は・・・」

半折にされた投票用紙を重々しく開き、霊夢はそこに書かれていた名前を、大きな声で読み上げた。

「・・・！十六夜咲夜！第二回ミス幻想郷は十六夜咲夜さんに決定しました！」

幻想郷全体を揺るがすか、と思われるような大歓声が、博麗神社全体から巻き起こった。

「あゝあ、負けかあ。あと5歳私が若かったら、負けなかったのに」
妙にさばさばした感じで、永琳がそうつぶやいた。

「永琳さん・・・」

「あなたもこういうイベントに出よう、と思うぐらい明るくなったし、人間味を取り戻したのね。私としても、うれしいわ」

永琳は無罪の証明された咲夜の胸を、ぽんぽんと叩いた。

「さ、かえる。今日はウコン飲んで自棄酒ねえ。うどんげも付き合わせようかしら」

永琳はバスローブをスクミズの上から（まだ着ていたのか）羽織ると、手を振りながら控え室のほうへ消えていった。

「よかったわね、咲夜」

レミリアも、今はまじりつけのない祝福の笑顔で、背伸びをして、やっぱり無罪の証明された咲夜の胸をぽんぽん、と叩いた。

「・・・はい」

優勝できたことだし、紅茶やクッキーに毒を入れるのはしばらくやめておこう、と思い直した咲夜だった。

「あ、いたいた。授賞式があるから水着のまま舞台のほうへ来てもらえるかしら」

司会の霊夢がミス幻想郷になった咲夜を呼びに来たようだ。

「了解。すぐに向かうわ」

「十六夜咲夜さん。ミス幻想郷選出、おめでとうございます！」

もっとも大きな金額を出したのであろうスポンサーの男性から、咲夜は大きなガラス製の優勝カップを受け取った。

ミス幻想郷になった咲夜には、幻想郷最高の細工職人が作った銀のティアラと、優勝カップに『ミス幻想郷』と書かれたレイ、そして目録が与えられた。

「ミス幻想郷。一枚写真を撮りますので、最高の笑顔でお願いします」

と、カメラを構えたのは射命丸文だった。

よく考えればすべての元凶はこいつだったような気がするが、今の咲夜にはどうでもいいことだった。

作り笑いなんてする必要はなかった。

咲夜は高々と優勝カップを掲げると、無罪の証明された胸を張り、自然にこみ上げてくる最高の笑顔をカメラに向けたのだった。

翌日の『文々。新聞』の号外。

『第二回ミス幻想郷に十六夜咲夜』

「先日行われた第二回ミス幻想郷コンテストで、ミス幻想郷に選ばれたのは紅魔館の瀟洒なメイドとして有名な、十六夜咲夜さんだった。各方面からは『順当といえば順当』『彼女なら仕方ない』といった声も聞かれ・・・」

参加者のインタビュー。

「まあ、あいつになら負けても別に悔しくないぜ！すげえ綺麗だったもんな。咲夜。今度二人だけでやらないか（予選第2位の霧雨魔理沙さん）」

「ナイフ以外に、あんな強烈な武器を隠し持っていたなんて。メイドなんかやめて、モデルかなんかに転職したほうがいいんじゃないの？（予選無視の博麗霊夢さん）」

里の声

「俺ミスコン見に行つてただけどよ、八意永琳も十六夜咲夜もどっちもむちゃくちゃ美人でやんの。どっちが選ばれてもおかしくない、と思つていたね。いや、俺は咲夜さんに入れたけどね（咲夜さんファンクラブNO.89の男性）」

「ん？ミスコンの結果？あんなもん鉄板だったろ。名人候補が順当に名人になつたようなもん。俺、結果分かりきつてたから行かなかつたぐらいだ（幻想郷の将棋指し）」

謝罪と訂正。

「十六夜咲夜さんはPADじゃありませんでした。謝罪して訂正いたします」

そんな一文が、号外の隅っこに小さく載っていた。
どこの世界の新聞も、謝罪と訂正の仕方は変わらないようである。

ミスコン翌日の紅魔館の前。

「咲夜さん！」

「咲夜さん、お顔を見せてください！」

「咲夜！俺だ！結婚してくれ！」

十人以上の男たちが、口々に好き勝手なことを言っている。

別に乱暴狼藉を働くわけでもないのに、門番も対処に困っているようだった。

「あゝもゝ・・・。うるさいわね。咲夜、何とかしなさい」

耳を押さえてレミリアが迷惑そうにそういう。

「何とか、といわれましても」

いつものようにレミリアにベーコンエッグを差し出しながら、咲夜も困った顔をした。

ミス幻想郷になつたからといって、咲夜の日常に変化があるわけでもない。

いつものように、紅魔館のメイドとしての仕事をこなすだけだ。

ただ、その表情はミスコンの前と比べると、少し明るい感じがした。
「2階のテラスからちよつと顔だけでも見せてやったら？それで男
たちも満足するかもしれないし」

そう投げやりに言うレミリア。

「はあ。では、そうしてきます」

レミリアの言いつけどおり、咲夜が二階のテラスから顔を出すと。

「咲夜さんだ！」

「美しい・・・」

「咲夜！俺だ！結婚してくれ！」

・・・余計に騒がしくなってしまった。

「メイド長！何とかしてください・・・」

門番の、中国風の衣装に身を包んだ娘が、泣きの一言を漏らす。

・・・仕方ないわね。

結局咲夜は、いつもの自分に帰ることした。

手品のように、どこからともなく10本のナイフを取り出し、それ
を・・・。

「はっ！」

騒いでいる男たちがめて、当たらないようにそれを投げつける。

「きゃうっ！め・・・メイド長・・・私にだけ当たって・・・ガク
っ」

・・・中国に当たってしまったのは、気づかないことにした。

「うるさいわね！早く帰らないと、お嬢様たちの食事になってしまう
わよ！」

咲夜の投げナイフの腕を見て、咲夜の美貌に惑わされていた男たち
は、ようやく彼女の二つ名を思い出したらしい。

男たちは蜘蛛の子を散らすように、先を競ってそこから逃げ出した。

「まったく・・・」

ナイフを投げて男たちを追い返した咲夜の顔には、迷惑だけではな
い、何かに困ったような、少し微妙な感情が入り混じっていたのだ。

つ
た。
終
わり。

私の胸はPADじゃない！最終話（後書き）

お疲れ様でした。

最終話、ということであとと長くなってしまういた。

5話にわたってお送りしてまいりました『私の胸はPADじゃない！』ですが、お楽しみいただけましたでしょうか。

少しでも楽しんでいただけたのなら、それに勝る喜びはありません。それでもし、何か感じ取られたことがありましたら、ぜひ感想欄に一言添えてやってください。

アマチュア物書きは、それが最大の原動力なんですわ

あと、表立って感想とか書きにくいけど、ちよつと応援がてらに感想書いてやるか、という方がいらっしゃったら、こちらにメールください。

基本的にお返事させていただきますが、返事がいない場合は『返信不要』と最後にお書き添えください。

sosuke1234g.live.jp

お手数ですが をアットマークに変えてアドレスをご使用ください。

東方の世界観やキャラクター設定、というのはとても深いものらしく、知れば知るほど書きたい部分も増え、また、東方ワールドの世界の魅力に取り付かれてしまうようです。

これからも私は東方二次小説を続けていきますが、お読みになつてくださる読者様にはガチガチの東方観にとらわれることなく、『ソースケの東方ワールド』と割り切って楽しんでいただけたらなあ、と思っております。

次は紅魔館のメイドの休日仕上げてしまいたいですね。

こちらのシリーズほどではありませんが、読んでくださっている方も結構いらっしゃるようです。

まだ未読の方はぜひ、一度お目通しくださいませよう、お願いします。

それではまた、次回作でお会いしましょう。

感想批評、お待ちしております。

東方プロジェクト本元

上海アリス幻樂團様：<http://www.16big.or.jp/zun/>

参考にさせていただいたゲーム

東方妖々夢・東方紅魔郷・東方緋想天

参考にさせていただいた書籍

東方求聞史紀

シューティングが苦手な方でも楽しめるゲーム（かく言う私も東方が気になってファミコン以来久しぶりにシューティングで遊びました。面白いですよ）ですので、気になった方はぜひ、プレイしてみてください。

緋想天は黄昏フロンティア様（<http://www.tasofro.net/>）が手がけていらっしゃる弹幕型格闘ゲーム（?）です。

こちらはネット対戦もできて大変盛り上がっています。

こちらもぜひ、プレイしてみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4595f/>

私の胸はPADじゃない！

2011年11月10日21時26分発行